

Title	デンマークに於ける貝塚構成時代
Sub Title	
Author	大山, 柏(Oyama, Kashiwa)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.2 (1928. 7) ,p.1(155)- 48(202)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史學

第七卷 第二號

昭和三年七月

デンマークに於ける貝塚構成時代

本會からデンマークの貝塚でもとの御話があつたので、大急ぎで書いたのが、本文である。書いて見ると、帯とも襷ともつかぬ中途半端のものが出来たが、何れは何んとかならうとの空だのみで、今回はこれで責を塞ぐこととする。

又本文の概要は、昭和三年六月十四日、史學會席上に於て講演をして居る。

第一章 總 說

其一 貝塚の説明

其二 貝塚發見研究の歴史

第二章 遺 跡

其一 地理的考察

A 地形の一般 B 地質的概察

其二 貝塚の内容

A 分布 B 位置 C 廣さ深さ

其三 貝塚以外の遺跡

第三章 遺 物

其一 遺物出土の状態

其二 自然遺物

A 哺乳類 B 鳥類 C 魚類 D 貝類

其三 人工遺物

A 石器 B 骨角器 C 土器 D 人工遺物の綜合

第四章 結 論

第一章 總 說

直接デンマークの貝塚構成時代（以下單に貝塚時代と呼ぶ）の實際に觸れる以前に、先づ貝塚なるものゝ性質を明にし、且つこれが研究歴史を述べてから、貝塚時代の細部に入ることとする。

其一 貝塚の説明

貝塚とは、食料に供された殘骸中、其保存比較的良好なる貝類が集積せられたものを指すのであつて、故意にこれを集めたものでなく、棄てた結果が、貝塚となつたのである。邦語では塚と稱するけれども、必ずしもこの殘骸が集め上げられて、小高くなつて居るのではない。多くが、平面に、場合によつては、表面からは何んにも見えないが、地下に集積せられて居るものも少なくない。而してこれ等の殘骸も年月を経るに従つて、其表面は次第に覆はれ、所謂表土と云うものが出来るのであつて、これも地形其他により一定しては居らない。且つ一部は農耕其他により、著しく後世の攪拌を受けるものも少なくなく、表土剝奪の結果、貝殻の一部が地表に露出したりすることがある。又道路工事や其他の土工により貝塚

の断面露出するに到ることもある。此の如くにして人目に觸れ、それが學者の知る所となるのが多い。

貝塚はデンマークに於て *Kjøkkenmødding* 即ち芥捨場と稱し、*Kitchen-midden*, *Küchenabfallhaufen*, *Débris de cuisine* 等と夫々云うて居るが、多くデンマーク語の「キョツケンムヨデング」を以て、學術用語に使用して居る。又他に *Affaldsdynger*, *Skaldynger* と丁語で云うて居るが、これを直譯すれば貝塚に當るもので、*Schell-mound*, *Muschellhaufen*, *Amas de coquilles* 等と同義で、これも屢々用ひられて居る。

此の様な貝塚なるものは、獨り先住民が造つたのみに限らない。人間が貝を捨て、そこに溜つたら貝塚になる可きであり、現に今日一部の土人中には、貝塚に近きものを造りつゝあるものがあるが、私共史前學者の貝塚なるものは、悉く過去に於ける、史前民の營んだものを指して居り、有史以後のものや、今日土民のものには特に、史後貝塚、現貝塚等と云うて、これを史前の貝塚と區別して居る。

史前貝塚なるものは、獨りデンマークに止まらない。我國石器時代にも貝塚の多いことは申すまでもなく、歐洲に於ても、英、佛、スペイン、ポルトガル、サルデニア等に存し、アフリカでもアルゼリア地方エジプト其他に、南北アメリカにもあり、極東に於ては、日本諸島（樺太、臺灣を含む）の外、關東州、朝鮮、露領沿海州等其存在の範圍は甚だ廣い。

これを文化方面から見ると、過半が石器時代であり、一部は金石併用時代より青銅時代にまで下り得

るが、この後二者は、前者に比しては、甚だ稀である。この石器時代に屬する貝塚を更に吟味して、同じ石器時代であつても、何れの文化階梯 (Kulturstufe) に屬するかと調べると最も古い舊石器時代 (Palaeolithikum) には、只今の所、全く見て居らない。勿論一部の舊石原人は貝類の捕食は、したこともあらうが、貝塚として今日存する程、それ程多量に食はなかつたものと見える。否寧ろ舊石原人等は純然たる狩獵民であり、魚すら數多く食うたとは考へられない。従つて貝類捕食の様な場合は、稀有の場合であつたものとしか思はれない。それが文化一段と進んだ中石器時代 (Mesolithikum) に於ても、其初期に屬する西南の Asyien でも北方の Maglemosen 等では、未だこれを見ないが、獨り「カプシアン」 (Capsien) 末であり、中石器時代として、其階梯詳かでないポルトガル Mugen 貝塚があり、他にスペインに Asturien 貝塚がある外は、北方デンマークに比較的多く存するけれども、これは同じ中石器時代としては、後期に屬するものである。更に下つて新石器時代 (Neolithikum) に入ると前述した以外の歐洲や我國のその如き、皆この文化階梯の所産である。

今述べようとして居るデンマークの貝塚の如きは、同じく貝塚であり、貝層の状態 (口繪參照) のみを見れば、我國等で經驗せられた人々であつたら、一寸の相違も無い様であるが、其根本に於て文化階梯に一段の差を辨へて、デンマークの貝塚、即ち中石器時代のそれを見て戴きたい。

この中新兩石器時代の文化相の相違に關して、最も簡單に述べて、参考に資して置く。元來中石

器時代なる時代の編年區分 (Chronologie) は、最近に唱道せられたものであつて、舊き研究には未だ無い。従つて資料も不充分ではあるが、久しい間、歐洲では舊石器時代と新石器時代とは、個々に發見研究せられ、其間には關係連絡がつかないで、所謂「新舊兩石器時代に於ける溝渠」(Hiatus)とせられ、學界謎の一つとせられたものである。デンマークの貝塚の如きは、單に新石器古時代 (Alt-Neolithikum) として取扱はれ、大局に於てこれ等を綜合して中石器時代を編年することに着意せられて居られない。今以て尙この舊套を脱せざる學者も相應に存する次第である。

然し中石器時代としては、この文化階梯に應ずる文化相を充分に認めることが出来る。先づ第一に舊石器時代と比較して見ると、前述して居る如く、舊石原人等は純なる獵者のみであつたに對し、中石器時代になると、純なる獵者の外、獵者であり且つ漁者たる生業分課が生れ出で居る。又舊石原人等は確たる家畜を有して居らないのに對し、一部中石原人、この貝塚民の如きは、家畜を有して居り、他にも飼畜の跡があるが、未だ牧者の分業までには到達しては居らない様である。一方遺跡に於て貝塚民ではないが、堅穴の如き顯著なる人工住居跡を止めて居る。人工遺物に於ては、石器は舊石文化と異なるものがあり、骨角器に於ても發育方向を異にし、骨角製釣針の如きは、明に漁獲を證明して居る外、中石器時代後期には、土器が出現して居る。これに對し歐洲新石器時代には、獵者、漁者の外、家畜も種を増し原始牧者の分業を示し、新に農者の始原を物語る資料もある。スキエ湖上生活 (Pfahlbauten) 跡の如

さよりは、數々出土して居る。尙中石器時代の諸遺跡では、單に住居跡として、竪穴を認むるに過ぎなかつたに對し、新石器文化では、家屋の建築進歩して方形に近きものがあり、且つ家屋の集團や通路までも發見せられて居る。中石器時代は死者に對し其遺跡は甚だ簡單であつたが、新石器時代になると、外部にも現れて居る、「ドルメン」(Dolmen)「メンヒル」(Menhir)羨道墳(Ganggrab)石箱墳(Steinkiste)等を遺し、其一部が所謂巨石文化(Megalithische Kultur)と稱せらるゝものであると共に、これ等の巨石墳(Megalithische Grab)中には、夫々副葬品まで存して居り、こゝにも中石器文化とは、一段と差が認めらるゝ。人工遺物に於ても、石器の如きは新石器時代は磨製石器時代とも別稱せらるゝ如く、磨製石器が發育し、舊中兩石器時代の打製時代とは、全く異つて居る。其外、詳細に見て行けば、骨角器、土器にも夫々特徴を發見せられ、兩者の差が明確となり得る。これを要するに、中石器文化は、舊石文化に對しても、亦新石文化に比しても、夫々文化階梯上の差を認められ、且つ舊新兩石器時代間の中間にあつて、兩者の溝渠を滿すものがあることは争はれぬ所である。

其二 貝塚發見研究の歴史

今貝塚それ自身の説明と共に、この貝塚時代の屬する中石器時代の文化概要を述べたが、更に貝塚なるものが以上の如き遺跡であると、學術上認めらるゝまでの経路、即ち貝塚研究史を述べることとする。

往昔多くは、貝塚があつたからとて、別に氣も留めなかつたものと思はれる。否今日でさへ、我れ我れが、貝塚調査に當り、貝塚に到着するまで、土地の人々に尋ねても要領を得ず、途方に暮れることに、屢々遭遇するのであるから、當初にこれが學者の研究對象になつたことも、ほんの新しいことであることが氣が付かれやう。勿論一部の古記傳説等に存するものが、無いではないか、これ等は全般から見れば、寧ろ例外とすべきものである。特に其名や其地點を知つたばかりでなく、其内容、特に科學的見地より見たるものゝ如きは、全く今日の所産に外ならない。

元來デンマークなる國は、史前學 (Præhistorie) の或る意味に於ける發祥地である。特に石器時代の如き、中世以降に於て、石器の人工物であると氣付かぬ人々は、ないではないが、これ等の卓見が未だ世に行はるゝには、到らなかつた。而して史前學上、これを石器時代 (Steinzeit) 青銅時代 (Bronzezeit) 鐵時代 (Eisenzeit) の三大時代區分 (Dreiperiodensystem) を試みたのが、デンマークのトムセン (Christian Jürgensen Thomsen, 1788—1865) であつて、一八三六年に *Ledetræd for nordisk Oldkyndighed* 中にこれを發表して居る。而してこの基礎に立脚して、石器時代の研究が行はるゝに到り、更に研究の進捗は、石器時代を新舊兩石器時代に分ち、更に夫々に編年區分が行はるゝになつたのである。

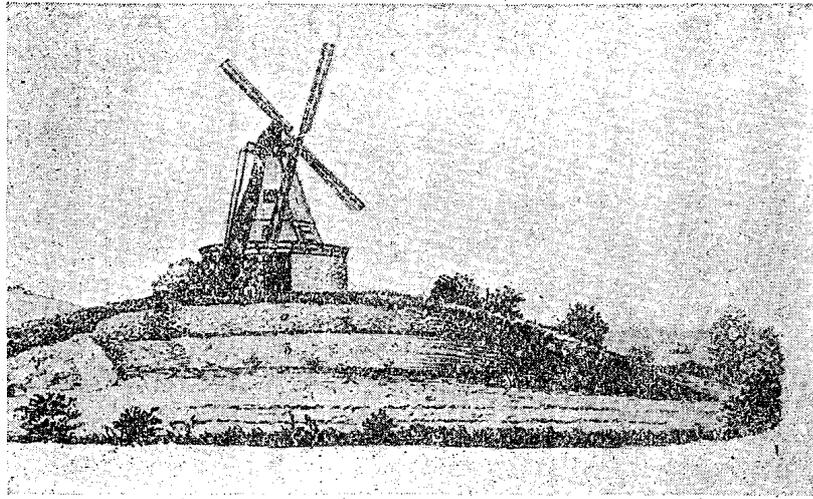
このトムセンの三大時代區分當時は、デンマークに於て貝塚は未だ多く學術的に注目せられては居らなかつた。而して石器時代として、人工物とせらるゝ對象は、主として同地方に於ける新石器時代の立

派な石器、就中石劍 (Dolch) 石斧 (Beile) 等の特に發育したものどもであつた。これを今日の目で見ると、こうした碩學の一大研鑽の對象たる資料に於て、豊富であり且つ特出したものが多かつた結果、この三大時代區分を遂げ得たのであつて、同様に佛の碩學モルチレー (Gabriel Morillet, 1821—1898) が、舊石器時代編年の大業を遂げたのも、一面からは、舊石器時代の文化中心が多く佛國平地に存し、従つてこれが研究資料の豊富である點は、トムセンと其軌を一つにして居る。又スエーデンのモンテリウス (Oscar Montelius, 1848—1921) の大研究も亦全く資料の豊富は同様である。これは碩學に對し、決して不尊の意味で云うて居るのではない。根本に於て獨り史前學のみでなく、より廣く考古學 (Archæologie) なる學術は、事實事物の學問である。研究の對象が實物にある以上、これを缺くるに於ては、如何に碩學と雖も、手の下し様がない。獨逸の如き學術を以て自から任ずる國であり、又學者も多いが、資料に恵まれざる點に於て、史前學上では、前述して様に、他國の後塵を拜せざるを得なかつたのである。

トムセン出で、三大時代區分をなしたに引續き、彼れの後繼者であるウヲルサエ (Asmussen Worsaae, 1821—1885) により、彼れの學業を補佐せられたのみならず、其功業を更に擴大せられたのである。

トムセンが石器時代を編年區分してより、石器時代の研究進展してき、漸く貝塚なるものが、學者によつて、注目せらるゝに到つたが、當初の問題は、それが人工的に集積せられたか、或は天然の作用に

基いて出来たものか判断が出来ずこゝに論争が起つたのが、一八四八年の出来事である。この問題に對し調査委員の一名として、考古學者を代表したのが、ウラルサエであつた。



第一圖 デンマーク Havelse 貝塚 (aが貝層)

ウラルサエは一八五〇年に至り、東ジュードランド (Ost-Jütland) に旅行中、Mejgaard の Edelhof 貝塚を見て、それが天然に出来たのではなく、木炭、獸骨、燧石破片等の混在は、原人等の委棄した結果、かく出来たものとの考を懷き、コッペンハーゲンに歸つてから、更にこれを確かむ可く、其年の暮には、コンペンハーゲンより最も近き、同じくゼーランド島内中央にある Havelse 貝塚 (第一圖) を、他の人々と發掘研究し、遂に其翌年、即ち一八五一年に同國考古學會席上に於て、『貝塚は自然に海が構成したものであるのではない。原人等の食物殘骸がかく集積せられたものである』との判決を下したのであつた。其時彼れは猶年齢三十の青年學者であつた。而して、この青年學者が貝塚の學術的發見者であり、今日研究の基礎をなして居る。勿論この發表に對して、當時學會全部がこれを容れないのみならず、彼れの學敵も少なくなかつた。然し彼れの信念は、年を追うて、益々堅さを増すと共に、其研究の進捗

に俱うて、又亦第二の發見へと進んだ。それは貝塚研究が積むに従つて、其遺物が、他の巨石墳其他から出土するもの、即ち今日の新石器時代遺物との間に、かなりの相違が存する點に氣付き、これを *Videnskaberne Selskabs Forhandlinger, Kjøbenhavn, 1859.* に於て、『石器時代には更に新舊兩時代があり、貝塚は古く、巨石墳時代は新しきものである』(1)との意見を發表した。こゝにも亦反對がある。其學敵として雄なるものは、年來の對者、博物學者であり、特に北歐氷後期に於ける植物編年を以て有名である *Japetus Steensrup* であつた。ステーンストルツプは、『貝塚は獵漁を營む庶民の所産であり、巨石墳は王者の墓たる故、かく其所有物に差があるのであつて、兩者時代的に相違を認め得ない』との説を以てウラルサエと争うこと數年に及んだが、*Emile Cartailhac, John Evans, J. Lubbock, J. Mestorf, Oscar Montelius, G. de Mortillet* 等各國の碩學が、次第にウラルサエに贊するに及んで、大勢は決し、この研究が石器時代内に於ける編年の端緒をなすに到つたのである。彼れの史前學上に於ける功業は、獨り石器時代研究に止まらず、青銅時代及び鐵時代に於ても編年を試み(2)て居り、後年モンテリウスの北歐編年(3)の骨幹をなすものがある。

以上の如き研究の歴史により、貝塚なるものが、研究の對象となり、且つ其時代も畫せらるゝに到つたのであつて、これが功業は、間接にトムセンに發し、直接ウラルサエに歸すべきである。而してウラルサエの後に、現博物館長である *Sophus Müller* があつて、*A. Madsen* 其他との共働による大著、*Afha-*

Udslynger fra Stenalderen i Danmark. 1900. により、各個の貝塚に關する夫々詳細なる調査報告を取纏めて、貝塚研究に對する有終の美を完うしたものと見るも、決して誇言ではない。

更に貝塚を營んだ時代に於て、貝塚でない單なる遺跡もある。これを歐洲では住居跡 (Wohnplatz) と云い、我が國では、遺物包含地と稱して居るが、此種遺跡も亦、デンマークより南部スエーデン、一部ノルエー及び、北獨沿岸等に亘つて發見せられ、廣く貝塚時代の文化相が明となつた上、デンマークのザラウ (Georg Darau) によりマグレモーゼ (Maglemose) を發見研究 (4) せられた結果、貝塚時代より以前に、更に中石器時代文化が北歐に存在したことが解つてきて、引て貝塚時代の時代的位置がより明となつたのである。

(1) ウナルサエの新舊兩時代と云うたのは、デンマーク内に於てあつて、新石器、舊石器時代を意味するのではない。新石器時代と舊石器時代とに時代區分したのは、英の J. Lubbock が一八六五年に試みたもので、ウナルサエの研究は、石器時代内に於ける編年第一者である。

(2) ウナルサエは青銅時代を前後の兩期に、鐵時代は前中後の三期に編年して居る。

(3) モンテリウスの北歐石器時代編年に關しては、拙稿、北歐の巨石墳 (人類學雜誌、第四一の九) 及び北歐の石斧編年 (同上、第四一の十) 參照。

(4) ザラウは Maglemose, Prehistorische Zeitschrift, Bd III, 1911, v, Bd. VI, 1914, を發表し、最近この時代に屬するものが F. Johansen, Svaendborg, 1919. H. C. Brohr, Holmegard, 1924. 等が發見報告せられたものに Maglemoseen なる編年期

が確立せらるゝに到つた。而してこれ等の時代には、未だ貝塚は無い。遺物包含地のみである。

第二章 遺 跡

遺跡として、直接貝塚や包含地等の細部を述べる以前に、一通りこれ等諸遺跡の存在するデンマークそれ自身の一般地形と、それに連關した地質學上の一二を述べて、當時の住民の環境を明にしてから、内容に觸れることとする。

其一 地理的觀察

A 地形の一般

デンマークは北に向つて突出したジュードランド半島とゼーランド・フューネン・ラーランド其他の大島を骨幹として、大小約百五十餘の島嶼よりなり、其全面積は我九州に略同じ大さである。これ等の半島島嶼は、北獨平地の流れを汲んで、到つて低く、山らしき山はなく、多くが、三十米内外の臺地が起伏するのみであつて、この比高關係は、東京附近に發育して居る洪積臺に近いものであるが、デンマー

クに於ては、各斜面の傾斜は著しく寛である。これ等臺地間の低地は甚だ低く、諸所に所謂低濕地乃至沼澤地とも種し得る程度にあるものと少なくない。マグレモイゼ遺跡の存するゼーランド島西部附近の如きは、其一例であつて、「モイゼ」の語は沼澤である。

國內には川と云ふ可き程の川も無い。従つて我國で見る様な大なる沖積平地も無い。然し海岸線は著しく屈曲に富み、且つ北歐氷河は一部に狹灣(Fjord)を作つてくれたから、更に海岸線を延長せしめたものであると同時に、この海岸線の屈曲は、各地に入江につぐに入江を以てした様な、小灣を生み、従つて内灣に於ける小規模の原始漁業には、最も適應した地形と云はねばならない。加うるに近海ノルエー海岸の如きは、魚獲豊富で今日世界三大漁場の一つと稱せらるゝ程の所であるから、デンマークも亦、海産は尠ない所ではない。即ち漁業に適應した地形と、豊富なる海産とを有して居つた結果、貝塚を營むに適應した要件を備へて居つたのである。此の如き觀察を、移して以て我國を見ても、略同様要件を具備して居る。即ち地形環境に於て、貝塚の御膳立てが已に出來て居るのであつて、石器時代の如き、文化低きものに於ては、此の如き自然環境が、如何に大きく、其生活に嚮くかゞ、これで充分に了解せらるゝ所と思ふ。

B 地質上の概察

こゝに述べようとするものは、地質それ自身よりも、地質學上の變遷であり、寧ろ地史的觀察なので

ある。然し其範圍は近く貝塚時代に關係ある部分のみである。歐洲に於ける、佛國平地を中心とした舊石器時代は、これを地質學上から見れば、洪積時代 (Diluvium) であつて、この洪積時代には、幾回かの氷河 (Gletscher) 現象があり、特に舊石器時代後半期は、最後の氷河に襲はれて居る。而してこの氷河の一大中心と認めらるゝものは、スカンジナビアであつたから、デンマークの如きも、其餘波を被り、氷蓋下に没する状態であつたから、一部の舊石器原人などが、こんな所に住居し得る筈がない。従つてデンマークに舊石器のないのも、何んの不思議もない。この最後の氷期もいつしか頂點を越えて、段々と氷間期、即ち溫暖に向うと、氷河の一部は、これに比例して徐々に溶けてくる。この雪溶けで氷は洗い削られて地貌が段々と表れてくる。この時バルチック海を中心とした諸地方には土地の沈降作用が起り、現フキンランド地方は海に没し、スカンジナビアは島となつてしまつた。これが地質學上の「ヨルデア」時代 (Yoldia) (5) であつて、氣候尙酷烈であつて、今日の極北地方に存する動植物しか居らない。デンマークは、この時反つて稍々降起し、ゼーランド島は陸続きとなつて居り、この附近への陸路交通の可能は認めらるゝが、人類生活に決して有利な條件は具備して居らない。特にこの「ヨルデア」時代は舊石器時代末の「マグダレアン」 (Magdalenien) (6) に當るものとせられて居るが、この「マグダレアン」人は洞窟住居者であり、このデンマーク地方には全く洞窟がない故、住居すべき所がない。而してこの「ヨルデア」時代も終末になると、其初期とは餘程異り、氣候の溫向は、馴鹿に伍するに大角鹿を以てし、

植物は *Dryas* と共に白樺が生える様になつてきて居る。

「ヨルデア」時代の次が「アンシルス」(*Angulus*) (7) 時代であつて、バルチック附近は前時代と反對に土地は著しく隆起し、フキンランド地方は陸続きとなつた上、デンマーク附近は依然隆起を續け、現諸島多く相合した上、現西南スエーデンとも接續してバルチック海は一大内湖となり、鹽分を感じて終に淡度強く、内海地方に「アンシルス」其他の淡水産の貝類が繁殖するまでに到つて居る。氣候は引續き温向して居るが、それでもスカンジナビアには尙氷蓋の殘存するものがある。植物界に於ては松全盛であつて、この松林に、所謂森林系動物 (*Waldfauna*) と云はれる、赤鹿、野猪の類が漸次に南方より入込んで、今日のスカンジナビアに近接してくる。此の如き状態にあれば、人類の居住は不可能ではない。もし寒季環境を好む人類ありとすれば、移住の可能は大である。たゞこの時代は最早や舊名器時代ではなく、文化上は中石器時代に屬して居り、ごく最近に所謂「アンシルス」文化 (8) と稱ぜらるゝ北歐最古の石器時代文化なるものが考へらるゝ様になつてきて居る。

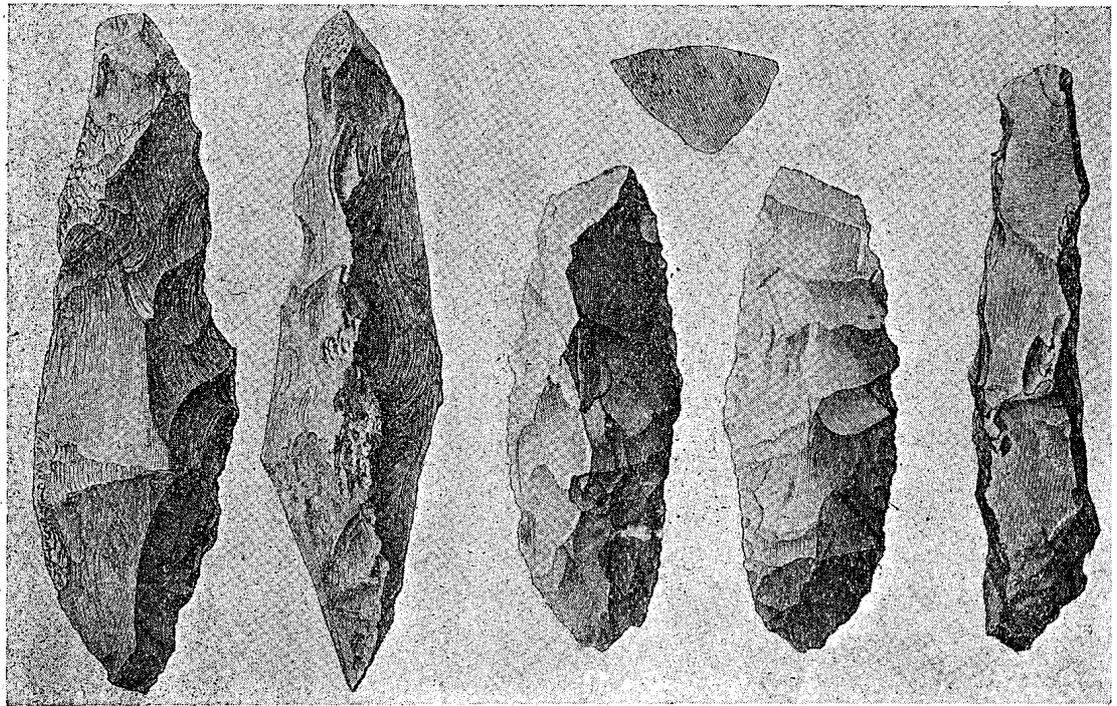
「アンシルス」時代の後が「リトリナ」(*Litorina*) 時代 (9) である。バルチック東部、フキンランド地方には土地の變化少なく大様今日の状態にあつたが、デンマーク附近では可なりの土地沈降が行はれ、スエーデンとの間が切れて今日のヲエルズンド (*Oere Sund*) 海峡が出来、他に多くが今日の如き島々となつて居り、北獨北海岸西部地方も、陥没があつたものと考へられて居る。氣候は著しく温暖となつ

て居る。「アンシルス」末期には、松の外に榊が茂り、「リトリナ」期には榊全盛となると同時に、「ブナ」
檜等を増し氣候は今日に比して、或人の計算では約十度も高いとのことであるから、(10)其數量は第二
としても、今日より著しく暖かであつたとは事實と考定し得る。従つて人類棲息には、甚だ好適な氣候
環境にある。

この「リトリナ」時代に史前學上の貝塚時代なるものが出來たのであつて、特に注意を要す可きこと
は、貝塚如き所謂海岸生活であつて、海との親しみを生ずることが、如何なる氣候環境に發生するか、
即ち海岸生活と氣候環境との關係に就て、考察する要がある。

「アンシルス」時代に於ては、氣候溫向の代償として、これに比例して、氷河及びこれが殘存部の溶け
可きことが容易に肯定せらるゝ。従つて川と云う川は、著しく増水すべきであるから、デンマークに接
續する北獨平野地方の如きは、或る意味に於ける氾濫時代なのである。而して前述して居る如く、「ヨル
デア」期及びそれ以前の氷河時代にはデンマークの地は無住の地である。それが「アンシルス」時代に
入るに及んで、住民が存する以上、これ等住民は何れの地方からか、このデンマークの地に移住して來
たものでなければならぬ。この移住路として考う可きは、北獨平野地方よりと、スカンジナビア經由
よの二方向であつて、未だ海路、水路移住の如きは、文化上考へられない。従つて來るとすれば、兩陸
路の外にはない。而してこの兩陸路何れを選ぶとするも、幾多の水上を横切らなければ、このデンマー

クの地には、入り得ないのである。此事情に對し更に考うべきことは、根本に於ける人類の習性である。人類は他の多くの哺乳類と異り、游泳の習性を缺いて居る。習はざれば遊び得ない。従つて最初から水に親みある動物ではないのである。このことから直に舊石原人の獵者であると云うたことも思ひ當るものがあると思ふ。此の如き水に親み少なき人類が、何んでデンマークで貝塚の如き最も水に親み深き生活を營むに到つたかと云へば、遠因は遠くこの「アンシルス」時代に求めねばならない。即ち、この氾濫河の御蔭で、第一次的に人類は水に親しむ可く餘儀なくせられたことも考へられよう。然しこの水との親しみは決して積極的のものではなく、消極的に止む得ざる場合に水を涉り越すと云う程度で、進んで水に入る様な状態は、第二次的であると考へる。一方氣候環境の上からも、實際貝塚時代より、より舊き「マグレモージアン」には、漁獲具の相應にあるに拘はらず、未だ貝塚の無い所からも、この考は力添せらるゝことと思ふ。勿論、貝塚時代以前に於ても、一部では魚獲も試みたではあらうが、未だ漁者たる生業にまでは、到達しはかつたものと想定せらるゝ。それが段々と進むに従つて、氣温は上昇して水に入り易く親み易い環境に於て、一方では地形上からも海産豊富の上からも、貝塚生成の要件を具備して居る以上、何等かの機會に貝塚人が水産獲得の味を占むるや、當然それが導火線となつて、遂には専門に近き漁者生活に導かるゝに到つたと想察するのも、無理多きこととは考へられない。否私自身はかく信ずるのである。且つ一面に於て、安居の希望は獨り人類に止まらな。動物の通有性である。



第二圖 スウェーデンスケーネ地方出土貝塚時代の祖形曲双斧の一例
(O. Montelius, M-F-F より)

それ故、獨り陸産に傾かず、海産と併せ得るに於て、食料範圍は著しく擴大せられ、勞少なく食滿つるに至り得るのであつて、人々がこれに傾く可きも考へられよう。然し貝塚時代に於ても、全民悉くが、これに走つたのではなく、一部には、依然として、純なる獵者ある所は、反つて當時の住民の個性が考へられて、面白くも思はれる。

たゞこの貝塚がデンマークのみにかく行はれて、其四周近隣にないことは、探査に價する。北獨西海岸地方は、海岸線屈曲に乏しく、内灣漁類も少ないから、要件に缺けてる。北獨北海岸地方は、多く陥没して居るとのことであるから、貝塚が存したか否か不明である。こゝに最も不思議と思ふのは、西南スエーデンに無いことである。勿論貝塚時代の他の遺跡遺物はあるが、(第二圖)貝塚はない。而してこ

の地方の海岸線も相應に發育して居るにも拘はらず、全く無い。モンテリウスは簡單に「貝塚の主體をなす「カキ」がこの地方に無いから、貝塚も出来なかつたのであらう」(Kulturgeschichte Schwedens, 1906. p. 10.)と云うて居るのみで、甚だ物足りなく思うて居る。私自身に於ても、今少し踏み込んで研究して見たいと考へて居る。次はノルエーであるが、こゝは若干より寒いだけで、他は要件を備へて居るが、貝塚としては、ウキステ (Viste) の洞窟貝塚を私は聞知して居るのみである。而して、ノルエーの貝塚時代には若干の特異相を持つて居るから、これは今回は割愛して置く。

其二 貝塚の内容

A 分 布

貝塚は北海に面したジュードランド西岸には殆んどない。たゞ西北端に近き Lim-Fjord 内に、最も有名であり且つ最も大なる貝塚である Aertebølle がある(口繪参照)。然し他の多くはジュードランド東岸よりフューネン、ゼーランド等の諸島にあり、特にジュードランド東岸 Mariager-Fjord & Fanerup 等に貝塚密在して居る點などは、一部我國などと、よく似て居る。これも海産攝取に都合のよい、所であるなれば、其地方に次第に集まつてくることも考へられよう。

B 位 置

貝塚の存在する局地に就て見ると、殆んどそれが、臺上乃至臺地斜面にあつて、幾分か沖積平地よりも高い所にある。元來貝塚なるものは食料の殘骸である。それ故これを棄てた當時に於ては、食物を喰うた附近に棄てたので、今日發掘して見ても、多く貝層下部に、燒土、炭、灰等が出土するのみならず、



第三圖 デンマーク Aertebölle 貝塚の爐跡
(S. Müller, u. a. A-S-D より)

所謂爐跡と稱せらるゝものが發見せらるる。第三圖に示したのが其一例であつて、
(11) 此の如き爐跡の存する以上、獨り食事場のみならず、彼れ等の住居も亦、ここに存したものと考へらるゝ。即ち貝塚なるものは、見方によつては、廣義の住居跡とも云ひ得る。又往々にして人骨が完全に發見せらるゝ點から見れば、墓地でもある。即ち生活跡なのである。今これを復原して見ると、原人等はこゝに住

居して、爐を設け、日々の食料殘骸を其四周に委乘し、死者あれば、その附近に簡單に埋葬としたのであらう。(12) 然しこうした原始生活に於ても、一般地形上、前述してきた様な、海陸の收穫豊富且つ容

易な所に住居を撰ぶと同時に、其位置に於ても、低い沖積平地には居らなかつた様である。而して彼れ等も氾濫とか巨浪、乃至は風雨季節に對しても、相應に顧慮し一方では、野獸とか他部に對ても、然る可き地點を選んだのではないかと思はれるものがある。こゝに例外とすべき極端なる一例がある。即ち *Beliggenhed* の貝塚であつて、其位置たるや、獨立高地の殆んど其頂上に存して居る。而してデンマルクとしては斜面も急であり、標高も五十三米を算して居る。それ故こんな所まで、貝や其他の獲物を擔いできたことには、前述して居る様な理由がなくてはならぬと思ふ。私は日本に於ける多くの貝塚を見て居るが、未だ、この様な地點に存するものは見て居ない。只南朝鮮の梁山貝塚が、略これと似て、山頂に近き鞍部に存して居る所は、それが東西地を異にし、文化階梯にも相違があるのみならず、相互に何等文化交渉なきにも拘はらず、同一現象を見ることを面白く見て居る。只此の如き頂上貝塚に於ては、食料の外、特に飲用水を如何にしたかは、考へねばならぬ所である。勿論この飲用水の問題は一般貝塚に於ても、常に考察すべきものであるが、これに關し、從來から餘り閑却せられて居ることを附言して、將來に備へて置く。

C 廣さ・深さ

貝塚の廣さは如何なる程度にあるかとは、よく素人よりの質問の一つである。これはまち／＼であつて、一概に云はれない。特に多くが表土に覆はれて、外觀よりのみでは知り得ないのが通常である。且

つ色々の事情から貝塚成生の當時のまゝではなく、多少とも變化もして居つて、充分に知り得ないものも尠なくない。これ等を調査して見ると、中には面積から云へば、狭いが、堆積は深く、含有貝類全量から云へば、面積廣く薄いものよりも優る様なこともある。それ故、嚴密に云へば、面積の問題ではなく、體積の如何にある。たゞ一般に同一地形に於ては、貝層厚さは、堆積時間に比例し、面積廣さは人口に比例するものと、簡單に考へられて居るが、そうばかりでも無い。

デンマークの貝塚に於て、Havne の如きは、長さ七百米もあるが、巾は僅々二十米に満たない狭長特異なものもあれば、私の調査した Solager の如きは、長さ三十米、巾約十五米で、こじんまりしたものもある。多くが、長さ百米内外、巾五十米程であつて、我國に住々見る様な千米を越す様な、廣大なものは無い。而してこれ等は、地形に基き、個々の貝塚相を呈す可きであるから、取纏めると、どこかに不合理を生ずることがあることだけは、御斷りして置く。

覆土も二三十珊に過ぎないものより、一米に及んで、一定しては居らない。時代が古いだけ、それだけ一般に我國などのそれよりも、深い様に思はれる。

貝層も覆土と同様、全く一定して居らない。通常三十珊乃至一米で、特に厚きものは、Majgaard の二米五十を算する様なものもある。特にこの貝層の厚さは、單に長時日堆積の結果のみでなく、當初の凹地、特に谷合等には深く溜り、斜面急なるときは、なだれ落つることもあるから、一概には考へられ

ない。

其四 貝塚以外の遺跡

貝塚以外の遺跡としては、殆んど遺物包含地のみである。例外としては、前述したノルエー・ウキステの洞窟貝塚があるが、他は遺物包含地である。貝塚時代に於ては、貝塚の盛名に覆はれて、單なる遺物包含地は、餘り人目について居らない。其内でも中部ジュードランドにあるブラーブランド (Brabrand) があり、多くの遺物を出土して居るが、特に例出稀れな完全土器(第十圖)の如きものが出て居る。同様の遺跡は單に洪積地盤上の外、沼澤がらも發見せらるゝ。例へば、ゼーランド島に於ける Bodalsmoor, Vallöby 等の如きものがそれであつて、外に Aero 島の港、Marstal やジュードランドの Kolding 如きは遺跡は今日海底に存し、各種遺物が引き上げらるゝ。而して前者の如きは、目下海面下一米五十乃至二米の所に存し、明に土地の沈降を物語つて居る。

デンマーク外の四周には、此種遺跡は相應にあり、貝塚時代の分布が、單獨遺物發見跡と相待つて、知ることが出来るが、これ等も今回は省略することとする。

要するに、貝塚時代は、其名の如く、貝塚を以て代表せらる可きものであると共に、貝塚はデンマークのみに存し、且つ遺物包含地と共に、本時代の中心がデンマークに存すると云うことが出来る。

(5) 「ヨルザア」時代とは、この時代を示す地層出土の極北系の二枚貝 *Yoldia arctica* に基き名づけられたものである。この「ヨルザア」に對向すべき哺乳類は馴鹿であり、植物では「ドリラス」である。

(6) 舊石器時代に關しては、拙著、歐洲舊石器時代に於て述べて居る。

(7) 「アンシルス」時代の名も、淡水産の巻貝 *Angulus fuviatilis* に起つたもので、其大き五ミリ内外の極小の貝である。

(8) 「マグレモーゼ」の研究に於て(4)の文献參照)ザラウは「マグレモーゼ」は「アンシルス」末に屬するものと考へたが、今日となり其後の發見から見ると、「アンシルス」末と見るよりも「リトリナ」初期と見るのがよい様に思はれる。然るにザラウと J. Alin の共著、*Goetnelvsomnedets Fornminnen*. 1923. に於て、アリンは北歐最古の石器時代を二期に分ち、第一期を北歐馴鹿期、即ち「アンシルス」時代、第二期を「マグレモーツァン」として居る(同書第七五項)所から見ると、愈々「アンシルス」文化なるものが、現れてきたのである。

(9) 「リトリナ」時代は巻貝 *Littorina Littora* (第五圖右上) により名づけられたもので、デンマークの貝塚からは澤山出土して居る。

(10) H. Obermaier, *Mensch der Vorzeit*, 1912. s. 469—471 參照。但今日デンマークの一年平均温度は七度強であるが、假に十度を加へ平均十七度として、歐洲では、スペインが略これ位位であるから、數量は兎に角餘程の暖かさが考へらるゝ。

(11) 文化階梯は違うが、貝塚なる性質上、爐跡は我國貝塚にも數多く見、且つ當然の現象と思ふ。但し其構造は、必ずしもデンマークのそのの如く、小石塊で圍んだもののみでなく、色々存して居る。

(12) デンマークの貝塚よりの人骨出土は、甚だ尠なくエルテレンと Aamölle 等より完全に近きものが出土して居る。我國貝塚からも、數多く完全人骨は出土して居る。

デンマークに於ける貝塚構成時代

(13) プラーブランドはコッペンハーゲン現土俗部長、Thomas Thomsen 氏（氏は大トムセンとは家族的に關係はない。）により研究（文献表参照）せられたものである。

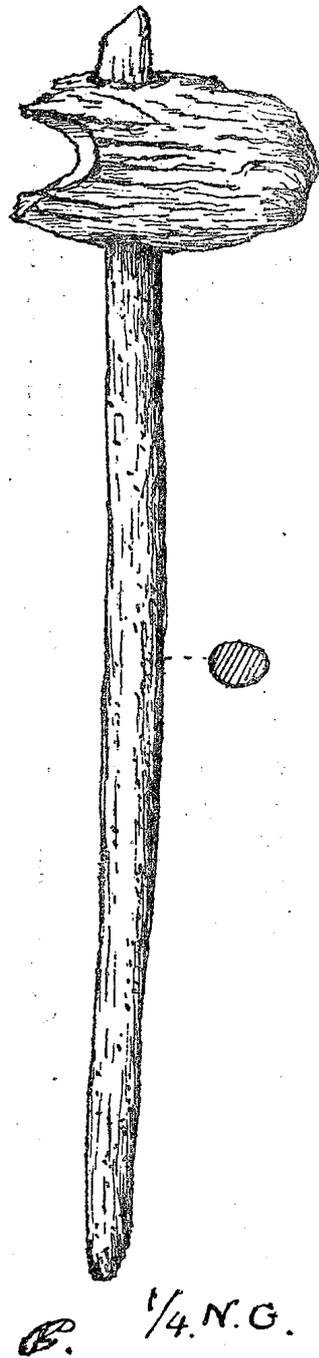
第三章 遺物

遺物としては、其種に於ても、其量に於ても、數多い方ではない。これも新石器時代などとは、若干其趣を異にする所である。其遺物を大別して、自然遺物と人工遺物とに分け、夫々に就て述べる以前、先づこれ等の出土状態から見てゆこう。

其一 遺物出土の状態

遺物出土の状態として、特記する様なものはない。特に自然遺物である貝類、獸魚骨等の食料殘骸は、隨時委棄せられたと見え、雜然と混同して居る。強て求めたなら、貝類、其内でも、「カキ」の如きは比較的密集して居る所があり、従つて收穫季節を考へしめるものがある。又原人等によつて、構築乃至設置した様な遺跡としては、前述した爐跡、埋葬人骨等の外、全く見て居らない。従つて其住居の構造等

も想察する何等の資料も無いと同時に、人工遺物に於ても、其用途を物語る様な、重要なる出土はない。漸くブライブランドより有柄のまゝ出土した骨製土搔きがある位である。(第四圖)



第四圖
ブライブランド出土角製有柄土搔き (T. Thomsen, T-A, A-D より)

其二 自然遺物

自然遺物として主要なるものは、動物遺骸である。其内でも貝塚が主要遺跡である以上、貝類が量に於て最も多い。植物は貝塚より例外の外、數多く出土して居らぬ。只貝塚外、特に沼澤遺跡よりは、所謂泥炭 (Torf) 化したものが出土するが、泥炭關係に就ては、研究すべきもの多く、特に植物編年等にも關係深いから、今日はこれを省略して、自然遺物として、理論上片輪になるが、多く主題となる動物に就てのみ述べる。(14)

A 哺乳類

貝塚民は單に漁獲のみに従事したのではなく、狩獵も併せ行はれた故、貝層中には、これ等哺乳類の殘骨が混入して居る。この骨類は多く破碎せられた部分のみであつて、殆どが亂雜に混在して居つて、取纏つて、一體分の骨骸が出土した様な例はない。又貝塚により、多少の多寡はあるけれども、骨片のみ合集つて、骨層とでも云ふ様なものになつて居る所もない。従つて狩獵の獲物は、食料となる際、多くが部分部分に斷割せられた結果、かく各部の殘存斷片が貝層中に混在したものと判斷せらるゝ。

哺乳類の種類は、所謂森林系動物群の代表的である、野猪、赤鹿と、ロト鹿が其量に於て殆んど九十%に達し、他の諸動物の出土は、甚だ尠ない。それでも綜合すると左記の各種を見て居る。

貝塚出土哺乳類一覽表 (S. Müller, u. a. A—S—D より)

- | | |
|---|-------|
| 1. <i>Lepus europaeus</i> = <i>L. timidus</i> | ノウサギ |
| 2. <i>Sciurus vulgaris</i> | リス |
| 3. <i>Castor feber</i> | ウミダヌキ |
| 4. <i>Canis vulpes</i> | キツネ |
| 5. <i>C. lupus</i> | ヲオカミ |
| 6. <i>Felis Catus</i> | ヤマネコ |

- | | | |
|-----|--|----------------------|
| 7. | <i>F. linx</i> | ネコヒヨウ |
| 8. | <i>Ursus arctos</i> | ヒグマ |
| 9. | <i>Martes sylvatica</i> | テンの類 (Baummarder) |
| 10. | <i>Mustela putorius</i> | イルチス |
| 11. | <i>Meles taxus</i> | アナグマ |
| 12. | <i>Lutra vulgaris</i> | カワウソ |
| 13. | <i>Phoca foetida (hispida)</i> | アザラシの類 (Ringelrobbe) |
| 14. | <i>P. groenlandica</i> | 同右 (Sattelrobbe) |
| 15. | <i>Halichoerus grypus</i> | 同右 (Kegelrobbe) |
| 16. | <i>Sus scrofa</i> | キノシハ |
| 17. | <i>Cervus capreolus</i> | ロージカ |
| 18. | <i>C. elaphus</i> | アカジカ |
| 19. | <i>Alces machilis = Cervus alces = A. a.</i> | エルクジカ |
| 20. | <i>Bos taurus</i> | ウシ |
| 21. | <i>Phocaena comminis = P. phocaena</i> | ネズミイルカ |

デンマークに於ける貝塚構成時代

22. *Orca gladiator*

シアチ

尙この外、家犬 (*Canis familiaris domesticus*) は明確に出土して、貝塚人の家畜を有した證據を示して居るのみならず、豚、羊、牛も繋育を試みたものと考へられて居るものがあるが、私は犬以外は研究の餘地あるものとして、これを保留して置く。

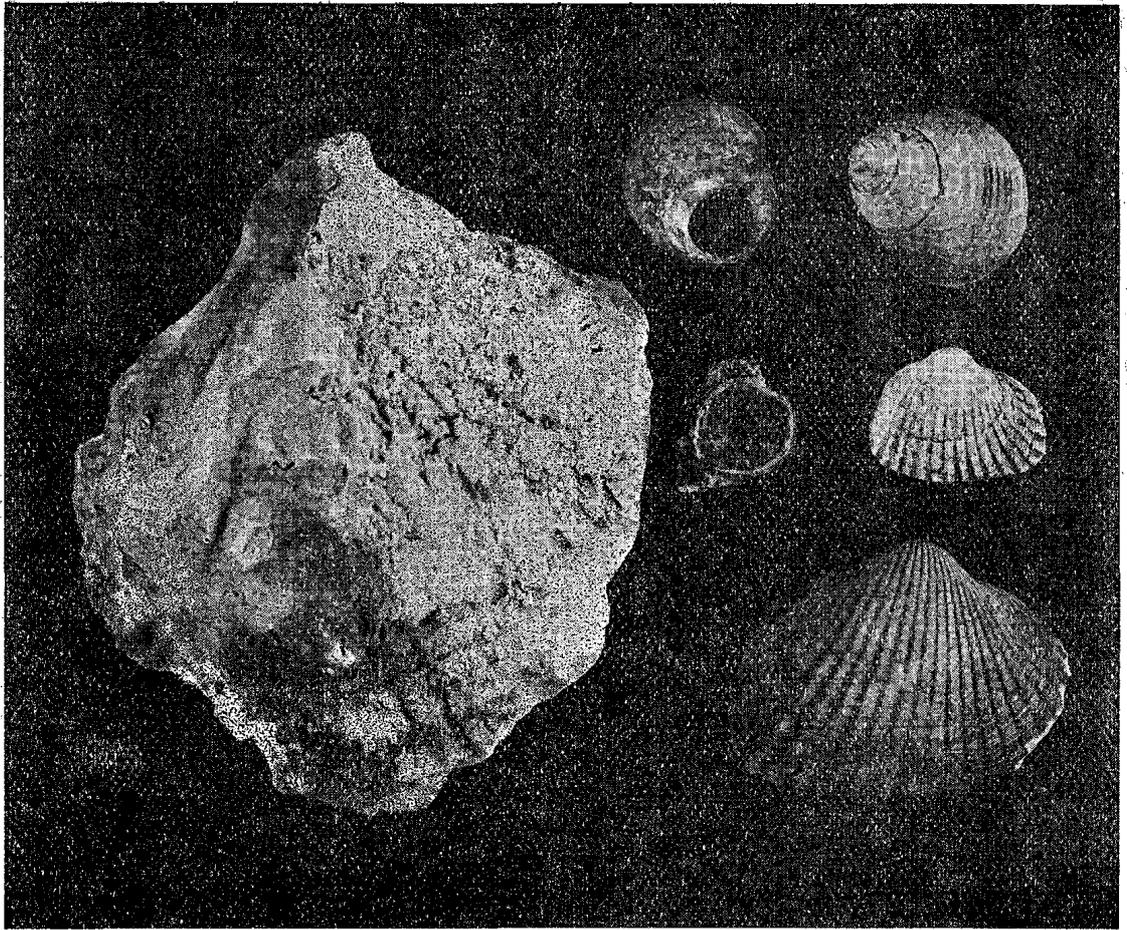
これ等哺乳類を大觀すると、洪積古形に屬する残存者もなく、極北系動物群 (*Arctic Fauna, Turanifana*) やステップ系動物群 (*Steppanna*) のものが少しも混入せず、全く新しく且つ森林系動物である點は、氣候の溫暖を示す一證であると同時に、海棲哺乳類が比較的多く混在して居る所は、海岸生活者の一面を物語つて居る。

B 鳥 類

鳥類の遺骨も相應に出土して居る。而して其主要なるものが、水に親み深い、水禽、涉禽の類である所も、前述した海棲哺乳類と一致して居る。而して「ガン」「カモ」「ハクチョウ」「カモメ」「クロヅル」等の外、「ペリカン」まで居つたと見える。この外「ヲオライテウ」(*Corvus corix*) (スッメ類和名ナシ) 等より尙數種が出土して居る。

C 魚 類

魚類も相應に發見せられて居る。其主要なるものは、「カレイ」の一種 (*Pleuronectes* sp.) 「タラ」(*Dorsch*)



第五圖 デンマーク Sölaget 貝塚出土貝類(實大)右上二個トリトリナ
右下縦の二個トリガイ・中央魚骨(屬種未詳)・左カキ(著者
採集大山史前學研究所藏)

「リシン」(Häring)「ヌ、キ」(Barsche)「ウナギ」(Aal)等の外、和名未詳の數種があるが、これを魚肉愛用者たる吾人等日本人の目から見ると、如何にも貧弱の憾を催すが、これは將來、デンマーク今日の所産と比較して見たいと、私は考へて居る。それにしても「スキ」の如き淡水混合の場所にも棲み得る様な魚や、鰻の如き淡水魚が、エルテペレあたりから出土をして居る所を見ると、同地附近にこんな魚類の生棲して居つた所があつたと同時に、貝塚原人は、單に海産のみに止まらず、淡水産

の生物まで、捕獲して居つたことが知り得る。

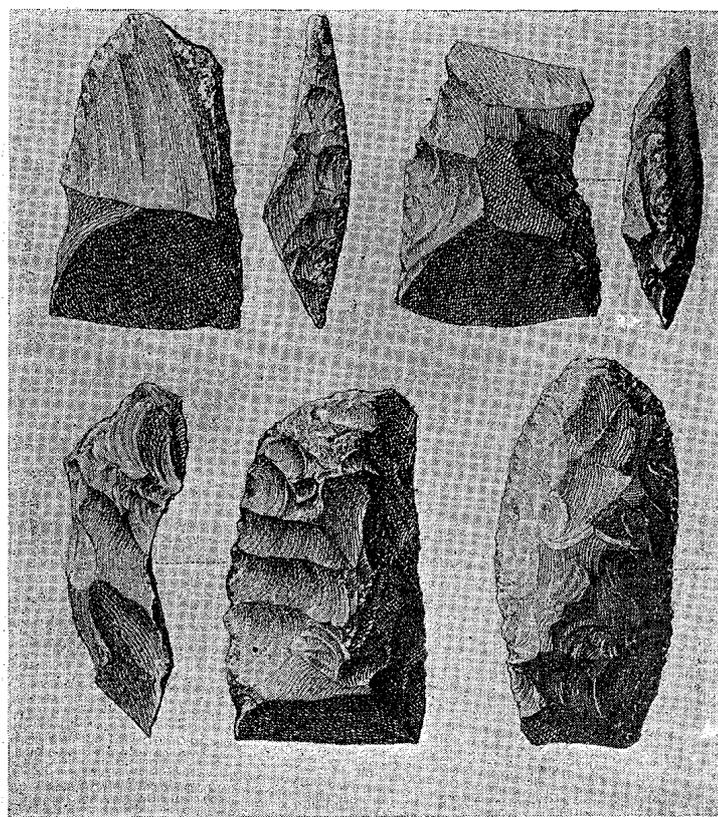
D 貝 類 (第五圖)

貝類も魚類と同様、其種に甚だ乏しい。而して貝塚の主體をなすものは「カキ」(*Ostrea edulis*)である。それ故デンマークでは、貝塚を「カキ」塚 (*Osterdynger*) と云はれるものがある程である。其他は「トリガイ」(*Cardium edule*) 「イガイ」(*Mytilus edulis*) 「ヨンバイ」科の一種 (*Nassa reticulata*) 「タマキビ」科の一種 (*Littorina Littora* 即ち「リトリナ」) 「アサリ」の一種 (*Tape decussatus*) 等が主要なる貝類であつて、この外「カタツムリ」や出土多からざるもの等を合計した所で、多くて三四十種を越えない範囲にあるものと思はれる。(15) 然して其種に乏しくとも、遺跡の状態に於て述べた如く、全含有貝量から見れば、随分よく貝類を多食したことは争はれない。且つ貝塚人と云はれる彼れ等は、漁者であり、鹽水淡水を問はず、水産攝取をして居るのであるから、今日遺骸に發見せられて居らない、色々の水産食料をも攝取したとは思はれるが、この外は私は未だ充分に研究して居らない。

其三 人工遺物

人工遺物として主要なるものは、石器、骨角器、土器等である。これ等個々の貝塚、包含地等より出土したものを取纏めて觀察する。

石器として、其量は相應にあるが、其種は餘り多い方ではない。特に貝塚時代石器として、特徴あるものは、所謂祖形斧と私が命名して居るものが最も顯著であり、次には直剪鏃と稱する石鏃の一種が、



第六圖 祖形直双斧の一例

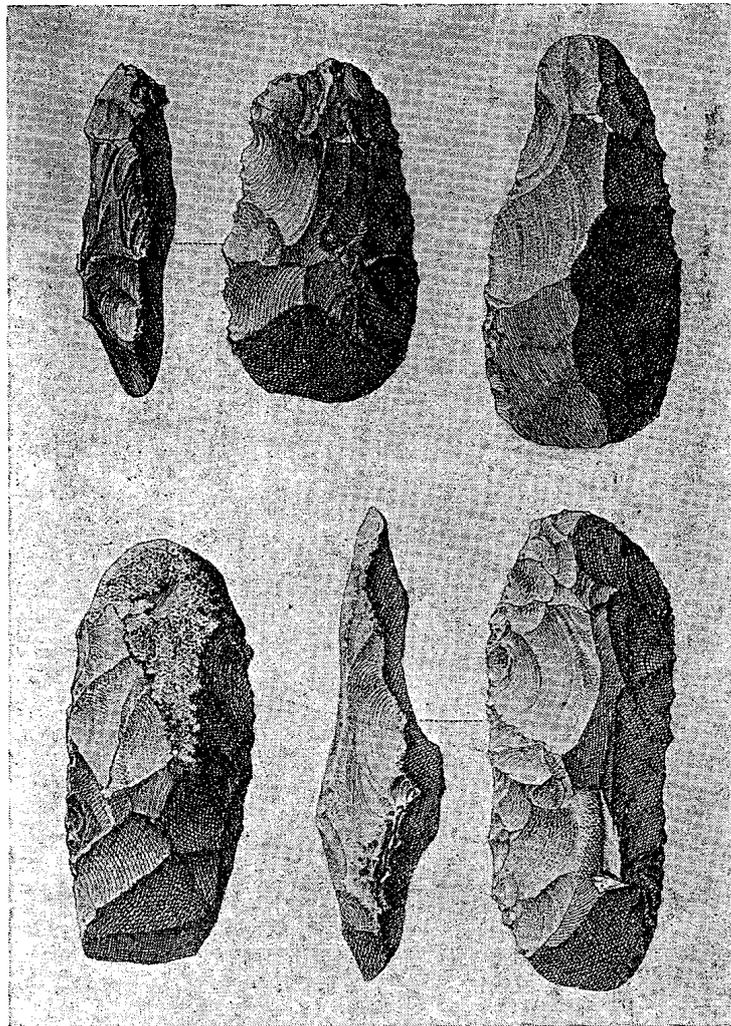
エルテボナレ貝塚出土(S. Müller, u. a. A-S-D より)

少々特色視せらる可きである外、他に存するものは、新舊兩石器時代に共通して、特徴發見困難なものどもである。

所謂祖形斧は、二種ある。甲は刃部に於て少々廣く、打裂面を巧みに利用して、直刃を造つたもので、全般の形が頭部に狭く刃部に廣いもので、これを Spalter, Kernbeil, と呼ばれて居る(第六圖)もので、私はこれを祖形直双斧と云うて居る。乙は甲と同様打製ではあるが、全般の形は、長橢圓形

をなし、刃部の方が、少々大きい、刃部は曲刃(或はこれを蛤刃とも云うて居る)である。ものによつては、兩端に刃があり、兩端使用の義から *Zweikantige Beile* と呼び或は *Walzenbeile* と云はるゝ

が、私はこれを、祖形曲刃斧と稱して居る。(第二圖及び第七圖)この甲乙兩斧を通じ、其大きさは、餘り大なる方ではなく、長さ一〇——一五珊を通常とし、稀に二〇珊に達するものがある。其製作は甚だ粗



第七圖 祖形曲刃斧の一例

エルテボナレ貝塚出土(S. Müller, u. a. A-S-Dより)

であつて、齊形打裂を試みて居らない。石質は燧石(Flint)であり、原石はデンマーク一般到る所に發見せらるゝ。この祖形斧は、粗惡であつても、兎に角石斧である。舊石器時代には、握り槌(Coop-de-pouing)こそあつたが、斧(Beil, Axt)はない。同じく重力を利用した打割主要具ではあらう

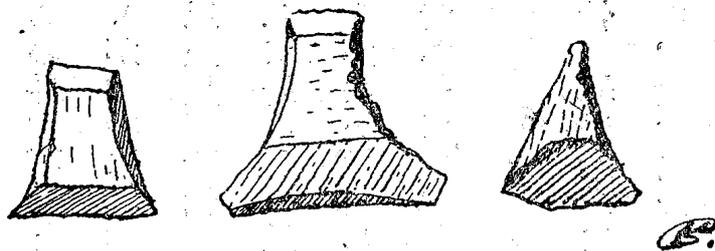
が、形が違ふ。中石器時代前期の「アジリアニ」にもない。「マグレモイジブン」にも本期の様に顯著なる發育はして居らない。只北歐には、中石器時代前期に屬すべきものでありとせられて居る所謂扁桃形石器(Mandelförmige)(16)なるものがあるが、これも斧ではなく、握り槌状のものである。してみると、

この祖形斧は、石斧としては立派でないにせよ、從來の發見に於て、最も古き石斧であり、且つ考へ様によつては、所謂原型 (Prototypus) とも云い得る。而して新石器時代の發育した立派な石斧 (17) に對

しては、格段の相違が認められよう。

この兩型祖形斧は、獨り北歐に止まらず、北方に於て現ポーランド附近等バルチック海東北岸地方にも發見せられ、西南佛國平地より、一部はイタリーにまで互つて發見せられて居る。其佛國平地に存するものが、所謂「カンピニアン」(Campignien) 文化であつて、北歐の貝塚時代とは少なくとも近縁あり且つ時代に於ても相平行して居る文化であり、この祖形斧が、兩者近縁の一證として、屢々主役を演ずるものである。

次に石器として擧ぐ可きものは、直剪鏃 (Quelschneidige Pfeilspitze) である (第八圖)。これは石鏃の一種であつて、我國などでは、石鏃と云へば、悉くが尖端を有するものに定まつて居り、他に形式など考慮せられて居らないが、この直剪鏃は、他の尖端に代るに刃部を以てして居る。換言すれば、石斧を小形にした様なもので、端末の刃部を利用する鏃なのである。而してこの貝塚時代には、直剪鏃の外、未だ尖端あるもの、即ち尖形鏃 Spitzige Pfeilspitze は出土して居らない。但しこの直剪鏃は



第八圖 直剪鏃の一例 (實大)

エルテボナレ貝塚出土 (S. Müller, u. a. A-S-D より)

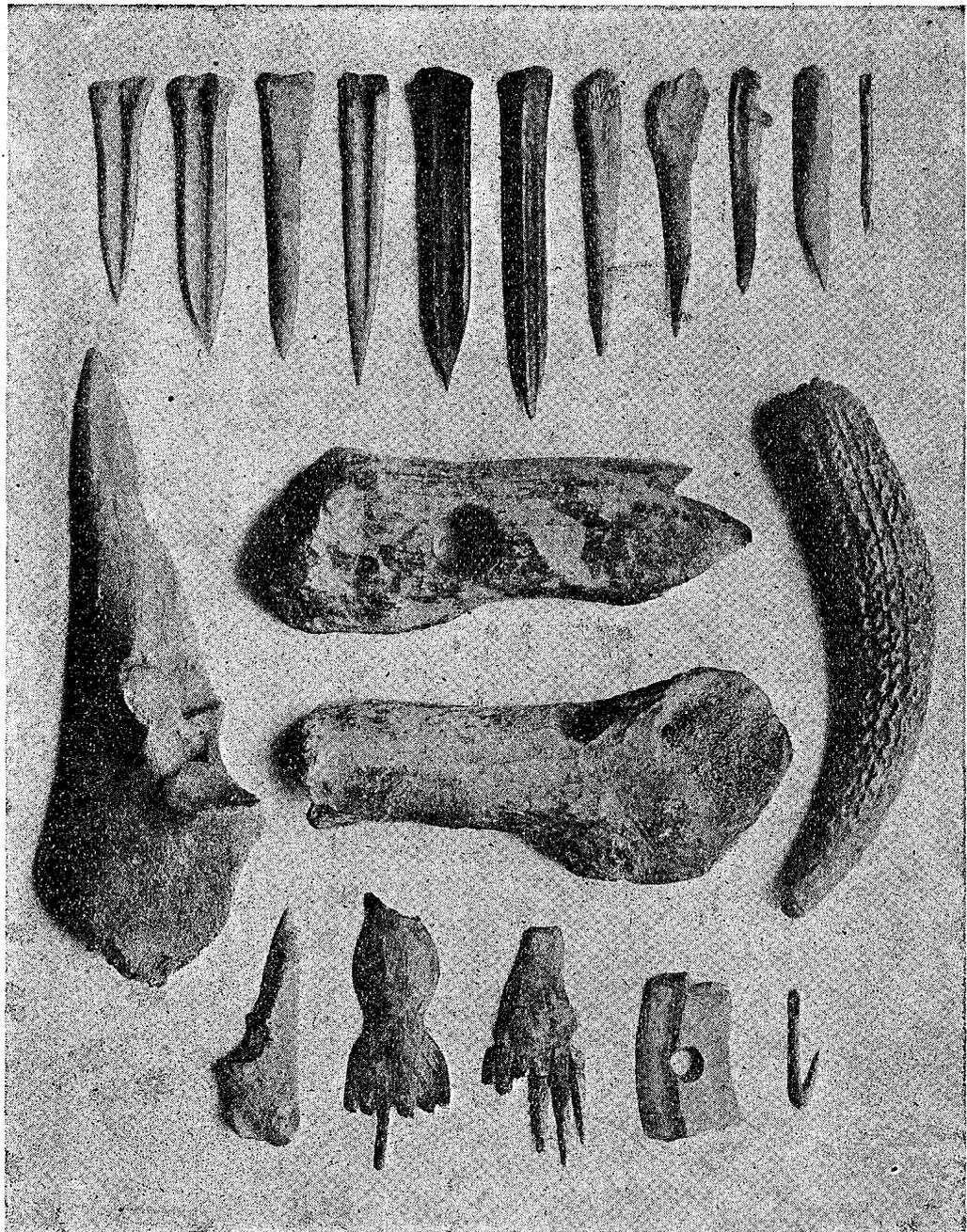
所謂細石器 (Microlith) (18) に屬するもので、中石器時代の一特徴をなすものではあるが、直剪鏃の如きは、中石器時代に止まらず、一部は新石器時代にも殘存して居る。而してこの分布も廣く、遙に遠きエヂプトにも發見せられて居る。

この外、石器としては、「グラトア」(Grattoir) (19)、「ラクロア」(Racloir) (20) 小刀、錐等が發見せらるゝが、特に本期形なりと特徴を持つだけのものは無い。

以上貝塚時代の石器は、悉く打製のみであつて、未だ顯然たる磨製はない。而して打製法も、餘り進歩して居るとも見られない。それ故、石器製作のみに就て見れば、打製時代であつて、舊石器時代とは變りがない。但し最近研究の進捗に俱うて、磨製始原に對する資料を考出せられつゝあるが、それが事實であつても、本期末の出來事で、全般から見れば、本期は少なくとも打製主用時代なのである。

B 骨角器

骨角器は大形なものより、小さな細工をしたものまで、其種も量も相應に多い。特に貝塚それ自身よりも、遺物包含地等より、より多く出土して居る點は、面白く見らるゝ。元來大陸民はそれが漁者であつても、一般島嶼民とは異り、獸類に親しみが深いのが通常であつて、全歐洲の石器時代(前期舊石器時代には未だ骨角器はない)を通して、骨角器はよく用ひられ、特に中石器時代以降に及んで、大形骨角器の多い所は、注意せねばならぬ點である。但し北歐それ自身に於ては、新石器時代に入ると、石器



第九圖 骨角器の一例(約三分一)

エルテポチレ貝塚出土(S. Müller, n. n. A-S-D より)

が著しく發育した爲か骨角器は歐洲他部の様な發展して居らない。それ故北歐では、この現象を捉へて以て、遺跡發掘の際骨角器出土は古き時代の資料として、注意を

して居る。

其種類は所謂土搔き (Hacke) (21) と稱せらるゝ、大形骨角 (角製が特に多い) の中央に柄を附す孔を穿つたもの (第九圖中央の二個及び第四圖) 及び角を利用した所謂尖頭器 (Spitze) (第九圖中列右側) の各種や、骨の一端を尖らせた尖頭器 (第九圖中列左側) 等が一例であつて、これが類形も多い。次に多いのが刺突器乃至針 (Nadel) と呼ばるゝ一群 (第九圖上列) であつて、貝塚より相應に多く出土して居る。たゞ不思議に思はれるのは、漁民でありながら、漁獲に最も有效な銛 (Harpoon) の未だ明確でないことである。従來學術的に出土明確を缺く遺物中、デンマーク其他では、四五の骨角製銛を發見せられて居る。而してそれ等は、新石器時代の銛とは、若干形式を異にして居る所から、それ以前、即ち貝塚時代に屬するものと推定せられて居つたが、今日となり、貝塚時代以前の研究進捗と共に、今迄の様に新石器時代より古いから、貝塚時代と直に決定し得ないのみならず、貝塚時代として、學術的出土明確なるものゝ内に、銛が未だないのみならず、「マグレモージアン」よりは確實に出土して居るから、從來貝塚時代と推定せられた銛は、少なくとも「マグレモージアン」か或はそれ以前の「アンシルス」文化に屬す可きものである。従つて貝塚時代としては、銛がないと見ねばならない。然し銛はなくとも、他の刺突貝でも刺獲し得るし、他に貝塚民は、漁獲具として優れて居る、釣針を所有して居る (第九圖下列右端)。これから見れば、漁獲法としては、一通りの發育を上げて居ることが認め得る。特に釣針の

形式から見ても、今日のその如き形式を備へて居るのであつて、他の形式に於て漁獲可能を疑はしむる様なものに比すれば、一段と優つて居り、且つ貝塚時代以前には、釣針と認む可きものは、「マグレモイジアン」に發して居るもので、發生の相應に古きことも考へねばならない。

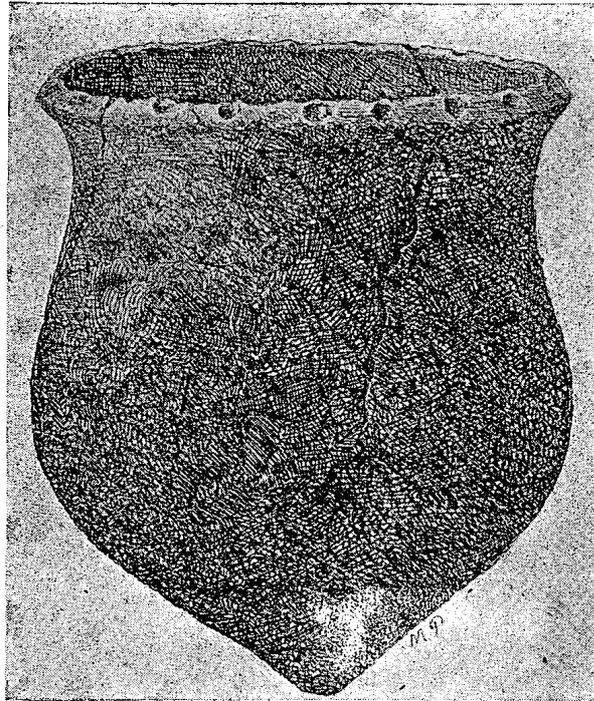
次に骨角製櫛 (Comb) と稱せらるゝ一特徴を持つたものがある (第九圖下列中央二個)。こゝに例出して居る二個とも破損して居るが、ブライブランドよりは稍々完全に近きものが出土し、マイルガードからは完全であり頭部に有孔なものが發見せられて居る。外觀からは如何にも櫛らしく見らるゝから、先學に従つて櫛と云うて置くが、之は、貝塚時代以前にはなく、新石器時代のとは全く形式を異にして居るから、比較資料に乏しい。従つて只今の所は、確實性に乏しい。櫛ならんと想像するのみである。

裝飾品と認めらるゝものゝ出土確實なるものは、甚だ尠ない。貝塚より僅に數個の齒牙製の有孔垂飾を出土して居るのみで、石製其他は、明確でない。又裝飾品であると思はるゝも一部の破片に過ぎないものも二三あるが、これを全般から見ると、石製其他もなく甚だ貧弱と云はねばならない。

更に裝飾紋様を附したものに就て見ると、土器は後述するとして、骨製土搔き其他の骨角器に若干の幾何學的な彫紋を施したものが、ブライブランド、及び Kintego 貝塚から、僅に二三點出土して居る。従つてこの出土も殆んど例外に近きものではあるが、これは前期「マグレモイジアン」によく發育したもので、其一特色とせられて居るに對し、本期にも、稀ながらも以上の如きものか存することが、よし、

前期と本期との連鎖に對し、餘りに微力ではあるにせよ、これから見れば、兩者の時間的距離に於て、甚だしく隔絶したものでないかと其片鱗が窺はれる。

C 土 器



第十圖 プラブランド出土土器
(T. Thomsen, T-A. A-Pより)

土器は前の「マガレモーション」には全く無い。本期にはあることはあるが、我國新石器時代などの様に矢鱈とあるのではない。稀に近きものである。完全、完全に近き形をなして居るものとして、私の知つて居る範圍に於ては、僅々數個に過ぎない。形は變化に乏しき壺形とでも云う可きもの(第十圖)が多く、中には淺き皿形、其他がある。而してこの壺形状土器には第十圖の様な尖底が他に二三の類例ある所が面白く見らるゝ。厚さは一珊内外、色は黒、黒褐、灰褐等で、粗製で、ヒビが入つたものが多く、外觀甚だ脆ろ相である。

裝飾としては、單に口縁に點々と棒状の壓痕を存するのみで、僅に *Ancolie* 貝塚出土の一胸片に、圓狀の平行刺痕を見るのみで、他に胸部施紋あるものは、私は全く見て居らない。

製作法も實物研究の際、注意はして居つたが、決定的なものを見出して居らぬ。

たゞ以上の如き、只一言に貧弱と云へる様な土器であるけれども、この土器は、石器時代としては、最も古き時代に屬するものである所に、其價値を認める。舊石器時代は勿論、中石器時代の前期には未だ全く無いのに、兎に角、突然に出現して居る所に、土器始原に對する疑問を藏する。即ち土器發明が如何なる動機に唆られて、出來たものかは、解らぬとしても、全く貝塚民自身の發明であるのか、それとも他より將來したのか、知り度いものではあるが、この土器始原なる困難な問題に觸るゝ可く資料が餘りに貧弱なのを遺憾とする。たゞ注意を要することは、本期と少なくとも平行關係ありとする、中佛平地の「カンピニアン」文化にも亦、土器を存するのであつて、こゝにも平行關係が認めらるゝ。而して「カンピニアン」土器には色々施紋があつたり、把手があつたりして、貝塚土器に比し、一段と裝飾發育して居る所が、更に土器始原に關する疑を深うするものがある。

D 人工遺物の綜合

これを綜合して見ると、石器に於ては、兩種祖形斧、直剪鏃が特色であり、骨角器では、大形の尖頭器類、土搔き等が特に發育して居り、小形に於ては、櫛の如き、一風あるものがある。土器は稀ではあるが、裝飾少ない粗雑な形態變化乏しきものがあり、これ等を以て、代表的遺物となすべきである。更にこれを北歐に於て、其前後の文化階梯から見ると、特に目につくのは、人工遺物全般として、多くが粗

製品であること、裝飾分子に甚だ缺けて居る點とである。前期の「マグレモーション」の如きには、割合に精製品もあれば、特に骨角器等に施紋したものが多く、又垂飾等もより多く出土して居る。北歐の新石器時代では、精品は恐らく全新石器時代を通して雄なるものがあると共に、裝飾藝術も新石器の文化階梯としては、一通り發育して居るのに對し、貝塚時代のみが、かく不振にあると云うことは、研究に價するものがあるが、これに關しては、更に複雑なる交渉を各方面に及ぼすものがあるから、他日取纏めて述べたいと考へ、こゝに其緒をつくるに止めて置く。

(14) 私は大正十五年十一月埼玉縣下柏崎村字眞禰寺に於て泥炭遺跡を發掘して居る。この報告は近く、私共の史前學研究所紀要として發表する考である。この際泥炭遺跡に關して、觸れるものありと信ずるから、泥炭遺跡に關しては、この報告で見て戴きたいと思ふ。

(15) 我國は水産豊富の故でもあるか、貝類の種は甚だ多い。勿論所により貝塚によつては、其種の少ないものもあるが、全國出土を通算するなれば、數百種に達して居る。何れこの詳細も私共の史前學研究所より發表する考である。

(16) この扁桃形石器に關しては、私としては、相應に考へもあり、又問題もあるが、こゝでは餘り複雑してくるから、觸れないことにする。

(17) 北歐の石斧に關しては、(3)に述べてる拙稿參照。

(18) 細石器に關しても、私としては、色々述べたきものがあるが、これも扁桃形石器と共に、問題も存することであるから他日に譲ることとする。

(19) 「グラトア」の説明は、(6)に述べた拙著参照。

(20) 同右。

(21) 土掻きに關しては、拙著、神奈川縣新磯村字勝坂遺物包含地調査報告(史前研究會小報第一號)参照。

第四章 結 論

以上述べてきた貝塚時代なるものを綜合すると、文化階梯上から見れば、中石器時代であり、その後期に屬し、これを地質學的に見れば、「リトリナ」時代に屬することは、動物群からも、こゝには述べて居らないが、植物群からも一致して、考へらるゝと同時に、遺物包含地地層に於ても、亦新石器時代に一致する泥炭層よりも、下部にある。従つてこの實在年代も、西曆紀元前約五千年乃至七千年と想像せられて居るが、この實年代算出の基礎に關しては、私は保證し得ない。單に概念的な數として、取扱つて置く。

一面に於ては、デンマークが石器時代研究の發生地であると共に、少なくとも貝塚研究の發祥地であり石器時代研究史上、特筆すべき國である。且つ碩學相繼で、研究は古くより、其量も多いに拘はらず、

今迄に其真相の多く傳はらないのは、一つにデンマーク語に災せらるゝ所も多い故と考へる。

然しこの貝塚時代なるものを、至細に研究して行くと、一部は已に觸れたが、未だ研究の餘地は尙存して居る。第一には、貝塚時代それ自身に於ても、更により新たな目——多くは、より科學的な——で以て見直す必要もあるし、特に貝塚土器始原の研究の如き、史前學上、重要な問題もある。第二には、時代上限に於ける「マグレモージアン」との関係である。これも未だ片鱗の外、確實なる文化交渉は、發見研究せられて居らない。従つて、こゝにも研究の餘地がある。第三には、平行關係ありとする、佛國「カンピニアン」との近縁の程度が、尙不明な所が相應にある。而してこの連絡研究は、寧ろデンマークそれ自身の地を離れて、佛丁中間諸國の調査に待つものが多い。これも點々とは、接續なき遺跡が無いのではないが、今回は、餘りに複雑する故、省略したが、これ等が、どれだけ、兩者の橋渡しとなるかは、研究の必要と、價值とが認めらるゝ。第四には、時代下限に於ける文化交渉、即ち新石器時代に對する文化移行の問題である。これも、今日不明瞭の點が多い。已述の如く、最近この問題に對して、磨製石斧始原の如き、一部の研究が行はれ、古くは、貝塚曲刃斧より、新石器時代初期の尖頭斧(Spitzebackige Beile)に對し、型態移行も考へられないことは無いが、どゝもこれ等の研究基礎に於て、私には了解し得ざる不安の點がある。餘談にはなるが、歐洲の研究に於ても、隨分杜撰なものもあり、ある種のもの、よく吟味しないと、飛んだ目に遭ふ。又一般に隨分思ひ切つて、論斷するものが多い。従

つて、一見して如何にも明快の様であつても、確しからさの上から見れば、單なる假設(Hypothese)に過ぎないものゝ如きを、知らないで、決定的な事實と考へると、大變な間違も起り得るし、貝塚時代の研究でも、細部に入ると、随分論争の種はある。それ故、今述べて居る、貝塚文化と、新石器時代の第一期である尖頭斧時代との交渉關係の如き、輕々とは取扱はれないと同時に、こゝにも研究が相應に存して居る。されば、今の所、貝塚時代を見れば、時代上下限に各々若干づつの溝渠があり、極言すれば、孤立文化に近いとも言ひ得る。それ故、貝塚時代の研究も、全く研究し盡されたものではない。今後の餘地が充分にあることを力説して置く。

更に方面を代へ、この貝塚時代の研究が、遙に遠い我國石器時代の研究に、如何なる關係があるかと云へば、直接文化交渉ありとは、決して考へられない。兩者の文化階梯は、相異つて居るにせよ、貝塚なるものを營むだ現象のみ取り出したならば、彼我共通して居る點を少からず發見せられ、或る意味に於ては、比較研究の資料たり得るものがある。次には、我國石器時代は、再々述べて居る如く、文化階梯は新石器時代のみであつて、より古き中石器時代も、舊石器時代も、未だ全く發見せられて居らない。何故に無いのか、無いが故に發見せられて居らないのか、或は研究不充分の結果、あるけれども、未だ見出されないのか、兩者に對し、今日尙解決せられて居らない。この問題に直接觸れずとも、少くとも、我國新石器時代文化なるものが、始原なしに突然に生れ出でたものとは考へられない。より原的な文化、

それは、中舊兩石器時代何れかに屬するにせよ、理論上無くてはならない。して見ると、我國石器時代文化祖原調査に當つては、より原的な文化に出會すべく、順當に發育してくるなれば、中石器時代を経過するであらうし、文化躍進すれば、舊石器時に直面するかも知れない。このことを考へると、對岸の火災視して居るやうな、歐洲石器時代、特に舊中石器時代の文化相の如きは、今日豫め調査研究して、將來に備う可きであると考へる。この考に對し、この貝塚研究の如きは、餘りに貧弱であるが、色々な事情で、充分なことが出來兼て居る。然し將來は、少くとも、中石器時代の研究は、取纏めて發表したものと考へては居るが、今回は私の研究した一部を紹介して、參考の一端に備へて置く。

參 照 文 獻

1. Avebury, I. ord. Prehistoric times. 1913. (P-T)
2. Broholm, H. C. Nye Fund fra den aeldste Stenalder, Holmegaard og Svaerdborgfundene. (Aarbøger for nordisk Oldkyndighed og Historie. 1924) (Aaar.)
3. Johansen, K. Friis. En Boplads fra den aeldste Stenalder i Svaerdborg Mose. (Aarbøger for nordisk Oldkyndighed og Historie. 1919) (Aaar.)

Une station du plus ancien âge de la pierre dans la tourbière de Svaerdborg. (Mémoires de la société royale des antiquaires du nord. Nouvelle série. 1918-1919) (S-A-S.)

4. Kossinna, Gustaf.
Die Indogermanen. I. Teil: Das indogermanische Urvolk. (Mannus-Bibliothek. Nr. 26 1921) (Ind. G.)

5. Montelius, Oscar.
Minnen Från vår Fornid. I. Stenaldern och Bronsaldern. 1917. (M-F-F.)

6. " "
Kulturgeschichte Schwedens. 1906. (K-S.)

7. Müller, Sophus.
Nordiske Fortidsminder. Antiquities Scandinaves. 1890-1903. (N-F.)

8. " "
Nordische Altertumskunde. 1896. (N-A. K.)

9. " "
Stenalderens Kunst i Danmark. 1918. (S-K-D.)

10. " " u. a.
Affaldslynger fra Stenalderen i Danmark. 1900. (A-S-D.)

11. Gbernaier, Hugo.
Der Mensch der Vorzeit. 1912. (M-V.)

12. Sarauw, Georg.
Maglemose. 1911. (Magl.)

13. Sarauw, Georg. och Alin, Johan.
Götälvsområdets Förmänner. 1923. (G-F.)

14. Shetelig, Haakon. Primitive Tider i Norge. 1922. (P-T-N.)
15. Thomsen, Thomas. et Jessen, A. Une trouvaille de l'ancien age de la pierre. La trouvaille de Brabrand. 1906. (T-A. A.-P.)
16. Verneau, René. Les origines de l'humanité. 1926. (O-Hm.)

大 山 柏